

石見の大震災

島根県地学会顧問 松井 整司

明治5年旧2月6日の夕刻、濱田地震が起こった。理学未発達時代ゆえ、発震機構や震央位置は不明確だが、潮位をもとに沿岸部は長さ約15kmにわたって隆起・沈降し、その変動量は下表の[C]と[D]の中に図示されている。その中で、豊ヶ浦はその後も地域の研究者によって変動量などに諸説が発表されているので、ここではとくに豊ヶ浦を取り上げて述べることにし、研究結果の変遷[C]⇒[L]を下表にまとめた。

豊ヶ浦の研究に打ち込んだ宇野正一氏は、独自の測量により豊ヶ浦の高さは約1.7m（浜田測候所の基準：以下総て潮位や高さはこの基準で表す）であるとした。また、20年間にわたる測候所の潮位データ、江戸期に豊ヶ浦が描かれた古絵図の存在などから、昭和5年以来定説となっていた[F]の1.5m隆起説を大きすぎる値として論破した[K]。だが晩年、氏は豊ヶ浦は地震で隆起していないとの考え[L]に傾き、1999年に他界した。

それまで、濱田地震の最も古い専門的報告は[C]と思われていたが、2001年に、偶然、より古い報文[B]が発見された。[B]には豊ヶ浦は『一面に隆昂して過半海面に浮み出て…』との記述があり、豊ヶ浦が隆起したことはほぼ確かなことと考えられるに至った。

一方、[J]の計算値からは発震直前の豊ヶ浦の潮位は約0.9mと考えられ、この値と上の[B]の記述から、これを地震直前の豊ヶ浦の平均の高さと見なせば、豊ヶ浦はここから宇野氏計測の約1.7mまで隆起したことになり、[C][D]の1m隆起説はほぼ妥当な値と考えられる。なお、小津波による海面変動はあったが被害報告はなく、この潮位変化は除外した。

豊ヶ浦の地変（隆起・沈降）に関する見方の変遷

	講話の中で各説に付けた「仮称」	提 唱 者	根 拠	発表年	地震からの経過年数
	地震発生			明治5.2.6	0
[A]	過少評価説	ライマン	地震の経験乏し	明11	6
[B]	過半浮出説	巨智部忠承	見聞と現地観察	明22	17
[C]	1m隆起説	濱田測候所長 石田雅生	石見と出雲西部2郡の各町村から3名以上の古老を選出し、その談話を縮合	大1	40
[D]	1m隆起説を支持	震災予防審査員 臨時委員 理博今村明恒	小潮ゆえ、干満差は隆起量とされる値よりはるかに小さく石田氏の値は概ね信頼できるとした	大2	41
[E]	海中出現説	石田雅生	不詳、隆起量にも触れず	大3	42
[F]	1.5m隆起説	園山市太郎	唐鐘の一老漁師の談話	昭5	58
[G]	出沒説	大島幾太郎	根拠示さず	昭10	63
[H]	1.5m隆起説と出沒説の両説を採用	濱田市誌編集委員会	濱田藩士 飛田守墨の漢詩の結句	昭48	101
[I]	出沒説の根拠を追認	宇野正一	同上	昭63	116
[J]	1m隆起説と出沒説を肯定	山内靖喜ほか	海上保安庁水路部に依頼し、算出してもらった濱田地震当日の天文潮の干満差から今村説を追認	平4	120
[K]	1.5m隆起説を否定	宇野正一	現地の簡易測量結果1.7mや測候所の潮位記録を集計して論破	平8	124
[L]	不隆起説	宇野正一	石見八重葎の古絵図の存在。今も海況によっては水没する豊ヶ浦。信頼できる体験者ら三編の文書に隆起の記述なし。	平10	126
[M]	1m隆起説と出沒説を支持	松井整司	午後5時発震。水路部の干満図。地震当日の海況。「過半…」の解釈。宇野の豊ヶ浦の測量値1.7mなど	平16	132